

特集

# 弔いと技術革新



## 編集にあたって

瓜生大輔 | 東京大学先端科学技術研究センター

弔いと技術革新。多くの方は、両者のマッチングに違和感を感じるか、研究・開発とは無縁の話に思うのではなからうか。実際、国内学会ではほとんど注目されていないが、国際学会では徐々に議論の俎上に載り始め、国内でも産業界あるいは社会的にはすでにさまざまな動きが起こっている。本特集では、なるべく多様な視点からこのテーマを概観するために、仏教僧侶、研究者、企業経営者、ロボットクリエイターなど、バラエティに富んだ執筆者を迎えることに努めた。

本特集の前半では、研究者の視点でこのテーマに

斬り込む。「1. 弔いと技術革新にかかわる研究トピック（瓜生大輔）」では、デジタル遺品や終活、葬儀、技術を駆使した弔いのデザイン、人工知能やロボティクスを応用した故人を<再現>する技術など、今後、研究トピックとなり得る事柄に広く言及する。続く「2. 死後のデータとプライバシー（折田明子）」では、インターネット上に残される故人のデータについて、SNS上での対策事例を取り上げ議論する。ユーザが死亡した後の本人確認や故人のプライバシー保護などの 이슈はすでに社会問題となりつつある。

次に、日本の弔い・葬祭儀礼を牽引してきた仏教僧侶の視点を紹介する。「3. 搬送式納骨堂を起点に考える寺院の未来（角田賢隆）」では、東京・赤坂で機械式納骨堂の運営に携わる僧侶の視点から、時代・社会と人々のニーズの変化に対応した供養のかたちと仏教寺院経営について提言する。対照的に「4. これからの寺院の役割とデジタルメディア（秋田



光彦)では、従来型のいわゆる「葬式仏教」に依存せず、地域における文化・コミュニティのハブとなる寺院経営を実践する住職の視点で、弔いと仏教の新たななかかわり方を含め今後の寺院の在り方とデジタルメディアの活用について展望する。

すでに事業化している弔いと技術革新の事例として「5. 遺人形がもたらす未来の弔い (古荘光一)」では、故人の姿形を3Dフィギュアとして再現するサービスを営む事業者として「遺人形」制作を開始するに至った経緯と印象的な顧客のエピソードを紹介するほか、「<対話>できる遺人形」など今後の応用・発展可能性についても言及する。

故人を<保存>あるいは<再現>できる人形やロボットが実現するとなると、そもそも無機物であるロボット(しかも死者のコピーロボット……)と人間が共生する社会は成立するのか。「6. ロボットに魂を込める (近藤那央)」では、「生き物らしいロボッ

ト」の創作を追求するロボットクリエイターの視点から、人々が「魂」を感じるロボットとは何か、そして生き物らしいロボットが普及した社会像について展望する。そして「7. 一緒に暮らす『ロボット』が死ぬ日 (太田智美)」では、家族ぐるみで“Pepper”と共生していることで知られる著者の体験から、「ロボットの<死>とは何か」という問題提起を行う。いずれもなんらかの結論を導きだすものではないが、デジタル技術の進化に伴い生・死の定義がゆらぎつつあることを示唆するトピックである。

本特集のみで「弔いと技術革新」にかかわる現象・事象を網羅することは難しいが、少しでも多くの方のこのテーマへの興味・関心が深まればと願っている。これをきっかけに、新たな研究課題を着想いただければ幸いである。

(2018年5月1日)